三井家同族の婚姻と相続

——三井禮子氏との対談——

安　岡　重　明

はしがき

三井家の存在形態については，財閥史研究の立場からだけではなく，社会史的にもたいへん関心がもたれている。なぜなら，発展した商家は数多くあるが，三井家ほど歴史も永く，家制度の整備された商家はそう多くないと思われるからである。

明治維新後，政府は三井家の信用と財力とを利用して政府の財政経済政策を確立しようとしたため，三井家を育成し，かつ利用しようとした。だから間接的な形で，三井家の改革にも関与した。明治5年当時大蔵省高官であった井上馨や渋沢栄一は三井家から不振の呉服業を分離するよう指導し，それを実行させた。明治24年にも三井銀行の立て直しのさい，ときの総理大臣山県有明が改革の相談にのっている。

このような経過をへているから，明治33年に制定された「三井家憲」は精緻をきわめたものであり，いわば日本の家制度の極致を示していると考えられる。そのため日本の家制度がもつ問題点がこの家憲のなかに浮きぼりにされている感がある。

私はかねて三井家の家制度の実態に関心をもっていたので，三井一族の歴史家三井禮子さんを通して御一族の方々を御紹介いただき，同族の社会的および私的生活の実際についてお話をうかがっている。この対談記録は，

昭和53年9月12日同志社大学至誠館の安岡の研究室で行われたものであって，当方は松本通晴（本学文学部教授），千本暁子（本学大学院商学研究科学生）および安岡の3名であった。この対談は本学人文科学研究所第二研究「家族制度の比較研究」の一環として行われた。

三井禮子さんは三井総本家（北家）第十代故三井八郎右衛門高棟（たかみね）氏の四女として明治38年3月16日生れ，女子学習院高等科をへて，東京帝大文学部聴講生として学校生活を送られた。大正13年11月22日連家のひとつ永坂町家の三井高篤氏と結婚された。その後離婚され，歴史家渡部義通氏と結婚された経緯については，この対談の中であきらかになっている。この機会にわれわれの意図理解され三井家の方々を心よく御紹介くださったり，御自身の対談に応じてくださった三井禮子さんに心からお礼申しあげる（以下敬称略）。

I　結婚と財産分与

安岡　最近御一族全員が，たとえば新年とか，何かの行事とかで，三井クラブ（三田綱町にあり，戦前は綱町別邸といって主として外国使節の接待に用いられ，同族の集会や家憲朗読会も行われた）にお集りなることはございますか。

三井　戦後はお正月の行事もありません。この頃では三井不動産がお正月に同族11家の人を招待するようです。どこか福井の方に。氏神である顕名（あきな）霊社のお祭りの毎年9月22日には集ります。これは麻生今井町の総本家の庭にあったのを，いま八郎右衛門高公（たかきみ）が住んでいる笄（現西麻生）町に移したものです。顕名社はそれ以前は下鴨のいま家庭裁判所になっているところにありました。三井高利（創始者，元禄7年〔1694年〕歿）の250年祭はここで盛大にやりました。敗戦前は家憲

朗読式も顕名さんを祭って行なったのです。

安岡　結婚するとき仲人がついたのですか。

三井　三井家同志の結婚の場合には仲人はつきません。

安岡　多少は仲介なさる方はいらっしゃるのですか。

三井　私の知っている限りでは，新町家の高遂(なる)が松坂家の三井恙(やす)子と結婚しております。御承知でしょうが三井家の発祥地は伊勢松坂ですが，京都に出ましてからも松坂には2軒残っていたのです。松坂家はその内の一つで恙子には姉がおり，女2人姉妹でした。ですから跡つぎの養子をとらなければなりませんので，養子は三井家から，ということでおじさん達が世話をして小石川家から高達(みち)というのが養子にまいりました。この姉妹のおかあさんが早くなくなったので，アメリカ人の家に預けられ，姉の清(すが)子が結婚してからは新町家が預かって，ずっと親しくしておったものですから，本人同士が好きになってしまい，新町の先代源右衛門が松坂家から養子にきた人で世話をやくような立場にいたものですから「うちの嫁に」ということになったのでしょう。それから，私の姉の興(おき)子は伊皿子家の第九代高長(ひさ)のところへ嫁いだのですが，聞くところによると，高長が若い頃アメリカの学校へ行っていた時，小室三(さん)吉という三井物産の重役がアメリカへ行って「北家（総本家）の興子をもらわないか」とすすめたようです。誰が小室三吉に言ったのかははっきり姉は知らないといっていましたが，きっと父の意を受けて行って交渉したのだと思います。

早くなくなった一本松家第2代目の高光(てる)の奥さんに五町目家の高昶(ちかあら)の姉さんの美尾子が行く。高昶には兄さん（高貞）と姉さんがいて2人とも正妻の子ではなかったので，それで高貞は籍が入っていなかった。そこで中川家という昔三井家と関係の深かった家へ養子に行った。五丁目家の先代の高尚(ひさ)は父の兄なのですが，わりに早くなくなっ

たので，高貞の妹の美尾子を誰か同族の人へやろうと思って父が心配したらしいのです。

安岡　家憲では婚姻関係は同族会の承認をえると書いてありますが。

三井　だからそういう風に決ってから議題として出すわけです。

安岡　同族会へは当主が出るのであって御夫人方は御出席なさいませんね。

三井　ええ，出ないです。

松坂家八代の復太郎が早く亡くなって（明治36年），実際には長女の清子が当主になっても同族会には出ませんでした。ちゃんと相続人になっていても正式の系図には書かないので，その期間はブランクになっているのです。大正9年に高達（みち）が入夫縁組したとき，高達が第9代の当主になったわけです。

安岡　住友家の場合，12代友親と13代友忠がつづいて亡くなられた。その時，12代目の妻登久（とく）が14代目になっておられるので，大商人の場合でもそういうことがあるのかと思っておりましたが。

三井　あるのでしょうね。でもこの場合はこうでした。

安岡　三井さんはどのへんから女性史をやろうと思われたのですか。

三井　女性史へはやはり家制度―家がオリのように思えましたから。

安岡　貧乏人の家にはあまりオリはないのですが（笑），金持ちの場合は守らねばならないものがあるからでしょうね。

三井　そうなんですよ。

一度，三井家の婚姻関係の全体を詳しく調べようかと思っているのですよ。高棟伝（総本家10代）が終らなければできないと思うのですが。

安岡　高棟伝の原稿はもうできたのですか。

三井　いいえ，これからなんですよ。兄（総本家11代高公氏）は，父の33回忌が再来年（昭和55年）ですので，それまでにぜひと言っているの

ですが，これから執筆の段階です。

松本　11家で同族会をつくっておられるのですが，11家の分家で小さい同族会をつくっておられるのですか。

三井　いいえ。ないです。

松本　分家筋が皆集まるとか，縁組の対象にするということはありませんか。

三井　分家だけが集まるということは，戦後はもちろんありませんが……。戦前は分家の問題がちょっとありました。

安岡　11家から分家された方ですね。

三井　ええ，次男以下です。わけ前が少ないということについてだと思うのですがね。私のすぐ上の兄高維（すみ）の場合でも，総本家ですから一番多いのでしょうが，やはり……高公と余りにもちがいすぎるということもあったのでしょうね。生まれた時から率が決っていて積み立てるのです。私の場合，20歳で結婚したのですが，大正13年11月で21万ぐらいでした。上の姉（慶子（のり））は30万ぐらいだったようです。20歳で結婚したと思います。高維も30万ぐらいかしら。今度はっきり聞いておきます。

安岡　分家の方々はどんなお仕事につかれるのですか。

三井　やはり三井関係の会社にはいった人もおりますし，他に入った人もたくさんおります。

安岡　分家の方々は財界人の追放の時には，かかわりにならなかったのですか。

三井　かかわらないです。財閥解体は11家だけです。

II 家庭生活

安岡　総本家の子女としての結婚なさるまでの日常の御生活の様子をお聞かせいただきたいと思うのですが。

三井　女の姉妹が5人いたのですが，御付(おつき)という特別の世話をする女中さんがそれぞれついていて，毎晩同じ部屋で寝ていました。子供は一人一人別々の部屋です。二階に八畳の部屋がいくつかあって姉が結婚すると次々と移っていくようになっていました。細長い化粧の間があってそこに鏡台がずらっとならべてありました。赤ん坊の時には乳母もおりました。学習院の幼稚園への送り迎えはおつきがして，幼稚園にはおつきの「供待ち部屋」があって，帰るときまでそこでお裁縫をして待っていました。

安岡　夜の食事はどうでしたか。

三井　皆，一緒でした。台所の係がいて，今日はどういう魚があるということを書いて母に見せると，母が献立を決めていました。父も皆と一緒で，ひと皿でも別ということはいたしませんでした。お料理をのこすと，人間の食べるものは何でもたべなければいけないと叱られました。

明治43年に父が団(琢磨)さんと一緒に母と上の姉をつれて「洋行」した時，母と姉のための女の人の通訳と新宮さんというお医者さん(三代目)も一緒でした。この旅行記を大勢の一行のうちの誰かが書いております。イギリスへ行けばイギリスで，フランスへ行けばフランスで，銀行が現在どうなっているか視察したり，日本ではどうしたらよいかなど，各国の状況と実業家の意見を聞いたりしたらしいです。

安岡　男の方は中学を出たら留学なさいますが，女の方はどうなのですか。

三井　大体，女子学習院です。はじめは華族女学校と申しましたが，私の頃は学習院女学校で，高等科の頃は女子学習院になっておりました。双葉女学校の人も大分おりました。永坂家では清心女子学院に通わせました。

安岡　そのあとはあまり進学されなかったのですか。

三井　その後は専修科というのが2年ありました。私の頃は高等科になっていたのでそれを出た後，東大の聴講生になりました。

安岡　ご専門は歴史の方ですか。

三井　いいえ，本当は歴史が好きだったのですが，三上（参次）先生が学部長でして，三井家史の顧問でしたのでそこにも家の権威が及んでいるように思えて，それを避けて主に社会学を聞いていました。戸田貞三先生や綿貫先生などがいらっしゃいました。聴講生は科を決めなくてもよいので国文学の教室にも出ていました。

Ⅲ　女性史研究

安岡　女性史をおはじめになったのはいつ頃からですか。戦後すぐに年表などをお作りになっておられますね。

三井　女性史は昭和12年頃からです。元の主人高篤が主に三井物産の仕事をしておりまして，ニューヨークの支店へ昭和5—10年ごろ行っていました。帰ってきてすぐに加藤静枝夫人（姉と同級）が，オーストリアのアズカラジー女史からよびかけがあって，世界中の女性史のエンサイクロペディアを作りたいから，日本のは日本人でつくってくれということでした。東大国史科出の遠藤元男先生を主任にお願いして研究室を借りて，そこで研究や編集などをしていました。戦後，社会党にはいられた新妻伊都女史も参加されました。女性史といっても通史

ではなく人名で，古代から100人ぐらいを選んで……。

安岡　歴史のおもてに立ったような人をですね。

三井　ええ，これはオーストリアのアズカラジー女史から直接に話があったのではなくて，日本に来たことのあるアメリカ婦人から言ってこられたので，英語の原稿をその人に渡すことになっていました。それで英語の原稿までは出来たので送りました。せっかく作ったのだから，日本でも日本語で出そうということになったのですが戦争になり，それどころではなくなりました。世界女性史エンサイクロペディアの日本編になるはずだったのですが……。その間にアズカラジー女史も亡命されてどこへ行かれたかわからなくなり，不成立に終りました。渡部(わたなべ)とはその研究会で母系制のことなどを話してもらったので，その時が出合いです。

安岡　アズカナジー女史は政治的な運動をしておられたのですか。

三井　政治的な運動だか，思想的だか，ユダヤ人だからか，わかりません。

安岡　戦争が終るまで日の目を見なかったのですね。

三井　戦後，石本（加藤）さんが原稿を送ったそのアメリカ人が，その原稿をもとにしてアメリカで日本女性史という本を出されました。それを石本さんが日本で翻訳なさいました。

安岡　三井禮子さんは一度，離婚なさいましたが，そのときどのような問題が起ったのかお聞かせいただけないでしょうか。総本家のお嬢さんが離婚となると大変なことだったのではないでしょうか。

三井　大変なことでした。はじめの結婚はままごとみたいな恋愛結婚みたいでした。とにかく高篤本人から申し込まれました。まずは，父のところに行くのです。私は16歳の時に他の親類から話がありました。それは父がはじめからそのつもりだったらしいです。

安岡　昔もご縁があったお家ですね。

三井　ええ，ですから父は私をそこへやろうとしていたのですよ。でもまだ数え16でしょ。ですからいやだって，ダダをこねました。それでのちに高篤のところへ行ったのですよ。大正13年です。

安岡　お別れになったのはいつですか。

三井　本当に籍を抜いたのが戦後の昭和29年，戦争中は籍を抜くといった手続きはできませんでしたから。戦前，女性史の研究会をやっている時に今の渡部義通に母系制の話をしてもらおうと呼んだのですが，そのときに「そんな女性史のやり方ではダメだ」と言われましてね。もう少し基礎的な勉強をしなければいけないということで，家に通って永田広志さんの唯物史観の本から勉強しました。昭和12年頃からですね。それからあの人ばつかまったりして。思想的には三井家はオリみたいなものですから，高篤個人というよりは家に対して反逆をしたわけです。

今の夫が空襲の頃，出獄したのですが，東京にいられなくて，故郷(くに)である会津に帰っていました。終戦になってから民主主義科学者協会の発想をして社会科学者だけでなく自然科学者も含めて色々な学者さんに働きかけたのです。そして終戦の翌年の1月に創立大会を開きました。この時，私の母が亡くなって私はこれには出られませんでした。

歴史部会にいた女の人たちで女性史研究会というのをつくっていました。女性史研究会では，研究だけでなく，社会的活動（啓蒙など）もやっていたので婦人問題部会に昇格しました。しかし，民科のようなところでも婦人問題や女性史など学問の分野にはそんなものはないと反対もありましたが，科学というものは問題があるところから始まるのだと理屈をこねて反論しました。私は部会の責任者をしていました。

年表をつくったのは，国際民婦連の50周年の記念に各国の年表をつ

くりたいといってきたからです。婦人運動史のです。私の家を編集室みたいにして女性史研究会のメンバーやアルバイトの人達で作成しました。その時はちょうど三一書房が年表シリーズをつくるときでしたので。女性史や婦人運動史は本の末尾に年譜的に書いてある程度で，年表として独立したものはありませんでした。ですから新聞（朝日）・昔の婦人運動の機関誌，婦人雑誌をくったり，運動した方の聞き書きなどからはじめなければならないので，大勢でしましたが，まる3年かかりました。基準を決めるのが大変でした。最初は新聞からとる時，婦人とか女とかいうのがあれば全部ぬきがきしてもらい，カードにしました。それからいろんな分野に分けました。労働から家制度，教育問題，母子問題，生活問題，戦後になれば平和運動といったように，10以上分野があります。そして分類し，この年には何が重要かということも討論して最後に決めました。ソビエトのパドパローワさんや，三一書房や，その他の人々からも後を出せ，出せと言われますが。年表は民科の婦人問題研究会の人が中心につくりました。

Ⅳ 冠婚葬祭

安岡　話は変わりますが，冠婚葬祭のときはどういう方を呼ばれるのですか。名簿などはご保存なさっていませんか。

三井　ないですね。

結婚の披露会は，三井家は外から見れば変ですが，質素にしなければいけないということで，絶対晩さん会はしないです。お茶の会だけです。兄高公の時には1000人か2000人ぐらいで綱町別邸（今の三井クラブ）でやって，家の内に入り切れなくて，外にテントをはっていました。それもお茶の会です。

雑誌『太陽』で日本の婚礼という特集をした時に昔の一番はでな婚礼について書いてくれと言われました。そのときアメリカ人のロバートという人が書いた『三井』(ダイヤモンド社，昭和51年)という本の翻訳監修をしていて，忙しいからとことわったのですがね。その翻訳書は安藤良雄先生に経済史面を見て頂き，私が家制度や固有名詞についてみていましたのですが……。でも実際に人をよこすので，兄の婚礼について話したり，姉の嫁入り道具について話しました。

松本　一般の家庭では書式がありまして，仲人さんからはじまって，嫁入りの道具の名前とかありますね。

三井　大正7年，二番目の姉(裕子(とみこ))が鷹司信熙男爵のところへ行ったのですが，その人が嫁入り道具の目録を全部保存しておりました。足袋が何足まで書いてあります。一番上の姉の時が一番多く，長持ちを5つぐらい持っていきました。

安岡　三井さんの本拠は松坂と京都で，主だった人は京都におられましたが，維新のとき総本家が東京に移らなければならなくなったわけですね。三井禮子さんの頃になると生まれた時からずっと東京で，たまに京都にこられるぐらいですか。意識は東京人ですか。

三井　そうですね。それで時々父にしかられます。

安岡　お父さんは子供の頃移住されたのですね。

三井　明治5年に留学した時，満15で東京へ移りました。

安岡　その頃でしょうか。一族の方が東京へ移ることをいやがっておられますね。ですから形の上では東京へ行きながら，京都に住んでおられた方があったのではないかと思うのですが。

松本　各家のお住いは，それぞればらばらですか。

安岡　ばらばらです。地名で呼ぶのですね。室町家とか。

三井　室町家と新町家とは，今だに京都の家のあった地名が家の名前にな

っています。北家，南家というのは今，国際ホテルのあるところですが，北家が総本家になり，南にあるのが南家（5本家の1軒）。昔の藤原のまねをしたのですよ。江戸時代によく系図を作りましたね。それで先祖を藤原かなんかにしたのですよ。

安岡　三井さんのところは武将の出になっていますね。

三井　本当は，近江の佐々木なんです。佐々木の家来で，佐々木が信長に滅された時，津の方に逃げるんです。そして津から松坂へ来るのです。明治に調べた時，津に三井というのが沢山あるらしいのですが，あまり調べると三井が名が出たときですので，先祖争いをしかねないので打ち切ることにしたそうです。初代高利の祖父高安というのは津では郷士だったらしいです。高利の父高俊は家祖，その前の越後守高安は遠祖といいます。

V　一族の交際

安岡　名声が出てくると皆，親戚だったと言いますからね。

総本家（江戸時代には総領家といった），5本家，5連家の間の交際の仕方についてお話し頂けませんか。

三井　交際というのはそう変りません。ただ同族の間で冠婚葬祭のやりとりをする時，本家はいくら，連家はいくらというように決っていたと思います。

安岡　収入が大分違いますしね。

三井　江戸時代にも誰かが死んだとか，子供が生まれたから，どこの家はいくらやれとか符号で書いてありました。

松本　総本家，5本家，5連家以外の次・三男のお家は冠婚葬祭の場合，どの程度関係してきますか。

例えば5本家の二・三男が結婚する時，その縁組をやめろとか，生活の中でそのようなことはしてはいけないとかいったことはありませんか。

三井　干渉はしないですね。例えば新町家の高遂(たかなる)の妹が結婚したとき，総本家でもよばれました。

安岡　何かルールがあったでしょうね。

松本　直接の本家が二・三男の日常の様々なことに関して相談にのるということはよくわかるのですが，その場合，総領家まで出てくるのか，逆に言えば総領家に何かあったとき，5本家の二・三男の方々が出向いていくのかどうか。

三井　連家の人にでも聞いて下さい。

松本　例えば，二・三男のお家に御不幸がありました時に，そのお家のお墓はどうしますか。

安岡　お墓は11家別々にお持ちでしたか。

三井　真如堂のお墓は，総本家と本家5軒。連家は東京の中野にあります。三井文庫の横です。分家は真盛(しんせい)寺にあります。はじめは深川にありましたが，今は杉並区梅里にあります。

松本　総本家や5本家の分家筋の方も真盛寺ですね。

安岡　非常に整備されていますね。

三井　どの家でも法事のときには東京で，そこの真盛寺の住職（現在は岩田教順住職）が来るのです。

安岡　中野のお墓には寺はございませんね。

三井　墓のある三井文庫の近くに電信局がありますが，そこにお堂があって法事はここでしていたのですが，戦災で焼けてしまい，電信局に売ってしまったのです。

松本　三井の同族の女の方で禮子さんと同じように女性史の方向に進まれ

た方はおられますか。

三井　おりません。

安岡　家憲を拝見しておりますと,「順良な子女として」というように,おとなしく相続人としておさまるようにという枠がございますね,商工業にタッチしないとか政党に関与しないとか。

三井　政治には関係してはいけないんです,当主も。

安岡　極端に言いますと無色透明の立派な人としてきちんとしていなさい,というルールですね。

三井　家業のポストについて,それだけをやって他の事業もしてはいけない,他の株も持ってはいけない。女の子は同程度の家のお嫁になるのに適当なように,学校から帰ると,お茶・お花・お琴を習うのです。

千本　三井禮子さんが女性史をはじめられた時,お家の方は何かおっしゃいましたか。

三井　大事なことは直接言いません。結婚の話もそうで,老女というのに言わせます。女性史をはじめた時には,結婚後ですので両親の管轄外でした。困る,と思っていたでしょうがね。

松本　結婚の話はめったに断れないのですか。

三井　私は16の時,断わりました。

安岡　全く未知の方ではないのでしょうね。

三井　いいえ,姉二人と妹は華族へ行きましたでしょ。これは父が位がほしくなったので,そういう方と関係づけをしたくなったんでしょう。父はブルジョア同士のところへは行かせなかったです。

安岡　男爵になっておられたので貴族のレベルという意識があったのではありませんか。

三井　そういうレベルに入りたかったのでしょうね,きっと。昔は大きい商人同士でした。住友さんもそうで,先代のおくさんのお母様は鴻池

さんからです。

安岡・松本　禮子さんの自叙伝をぜひ書いて欲しいです。三井家の中でそういう生き方は大変でしたでしょう。

三井　大変でした。今から考えると高篤は気の毒でしたね。その時は夢中でしたけれども。

高等科のころ大正デモクラシーですので自由がとても欲しかった。東大聴講生になるときにもハンストをしました。

安岡　女子学習院から東大の聴講生に行かれるかたは，ちょいちょいあったのではないですか。

三井　いえ，他にはなかったんでしょうね。女子大へ行った人はありましたが少なかった。女子大へ行きたかったのですが，東京女子大も日本女子大もクリスチャンだから。うちは天台宗だからということでしたので。でも，日本女子大は小石川家の人が創立の時に関係しており，娘も入学したりしました。

安岡　貴重なお話をどうも有難うございました。

〔備考〕　文中にでてくる文献について説明する。三井禮子氏の作成された年表は同氏編『現代婦人運動史年表』(三一書房，1963年)，三井家の家憲である享保7年「宗竺遺書」は安岡著『財閥形成史の研究』(ミネルヴァ書房，1970年)，三井文庫編『三井事業史』資料篇一（同所刊，1973年）に，明治33年の「三井家憲」は，前掲安岡著および『三井事業史』資料篇三（1974年）に，全文掲載されている。